

第八回日本保育学会発表

—特集 II—

共同研究報告

「本邦幼児発達規準の研究」

「目次」

一、総	説	山下俊郎
二、全体計画	竹田俊雄	
三、運動的発達	山下俊郎	
四、知的発達	村山貞雄	
五、情緒的発達	松村康平	
六、社会的発達	児玉省	
七、テスト化の方法	村山貞雄	

一、総説

山下俊郎

わが国の幼児について発達の規準を作製し、それによる発達診断の方法を確立しようとするこの共同研究は、去る昭和二十八年五月の本会第六回大会においてその実施を決議されたものである。爾来、共同研究委員会を結成し、児玉省、竹田俊雄、平井信義、松村康平、村山貞雄、山下俊郎の六名が委員となり、昭和二十八年秋以来、二十数回にわたる委員会によってこれを進めて来たものである。当初の計画にしたがって、まず昭和二十八年度は東京地区において三歳—六歳の幼児約四〇〇〇名を目標として、資料を蒐集して研究を行い、その中間報告は昨年第七回大会においてこれを行った。さらに、昭和二十九年度は、第一次調査の結果によって、これを全国的規模において調査し、一〇〇〇の地域において約四〇〇〇名を対象とすることを目標として実施した。このような全国的規模においてサムプリングをかった研究は、わが国はもとより、世界にも類例のないものであるといひ得られるであらう。

調査の実施にあたって、調査を運動的発達、知的発達、情緒的発達および社会的発達の四つの面から行うこととした。その調査項目の立案は、運動的発達を山下、知的発達を村山、情緒的発達を松村、

社会的発達を児玉の各委員が担当し、全体のサムプリングおよび実施計画を竹田が担当した。また、集計の結果を統計的に処理して、これをテストとして用いられる形にまとめることは村山が担当した。実際の調査にあたっては、日本女子大学、お茶の水女子大学、東京家政大学、東京文化短期大学、学習院大学、実践女子大学、頤栄短期大学等の学生諸姉の協力を得て行い、一部に保育所保母および高等学校教諭の諸姉の協力をあおいだ所もある。資料の集計も、第一次集計はこれらの学生諸姉によって行い、全体をもとめることは主として日本女子大学の学生諸姉をわずらわした。これらの諸姉は献身的にこの大事業に参加して下さったのであって、その努力に対しては厚く感謝したい。

この研究に必要な研究費については、その大部分をフレールベル館および小学館の寄附にあおぎ、一部は昭和出版株式会社および日本保育教材株式会社の厚意によってまかなった。これらの諸社の御厚意に感謝する次第である。

なお、この研究の詳細な報告は、今秋フレールベル館から刑行され、診断用のテストも同社から発売される予定である。

二、全体計画

竹田 俊雄

概要 この調査は予備的には東京都区内二一六歳および三〇〇

名の幼児について行われたが、「幼児の教育」第五十三巻第九号、山下俊郎 共同研究報告 参照、本調査は日本全国から一〇〇地区を無作為標本抽出法により選定し、各地区につき三歳児・四歳児・五歳児・六歳児男女各五名、計四〇名を無作為抽出して、総計四〇〇名の幼児について、調査員が家庭訪問を行い、所定の調査票によって、本人と保護者に面接調査を行った。調査の時期は二、三の地区は多少遅れたが、原則として昭和二十九年七月から九月の間であった。

地区の選定 地区については(A)六大都市、(B)人口二〇万以上の市、(C)一〇万以上の市、(D)一〇万以下の市、(E)町村の五階層とし、昭和二五年国勢調査人口(全国八三二〇万)をもととして

(A)六大都市(一一一九万)

一三地区

(B)二〇万以上の市(四七一万)

六地区

(C)一〇万以上の市(五四二万)

六地区

(D)一〇万以下の市(九八八万)

一二地区

(E)町村(五二〇〇万)

六三地区

とし、(A)については各都市の人口比により地区数を定め、無作為抽出で調査地区を選び、(B)、(C)および(D)については全国を通じてそれぞれ無作為抽出で調査地区を選び、(E)については各都道府県(E)の部分の人口比によって地区数を定め、無作為抽出で調査地区を選んだ。この結果次の一〇〇地区が調査地区として選定された。

(A)東京都中央区、横浜市など一三地区

(B)宮城県仙台市、静岡県静岡市など六地区